

### 3 ぶどう

#### <減肥ポイント>

- 地力窒素の供給が多い園地では窒素減肥が可能
- 無核栽培の若木では強樹勢となりやすいので、移植後数年間は窒素施肥を行わない
- 堆肥の肥料成分を活用することで化学肥料を減肥できる（肥料コスト削減）

#### (1) 窒素の総施用量を削減する技術

ぶどう樹が吸収する窒素は、「Ⅱ 施肥基準」の項にも記載の通り、いわゆる地力窒素の割合が高い。地力窒素の供給が多い園地では、窒素減肥が可能と考えられる。

また、**短梢せん定による無核栽培では、特に若木は強樹勢となりやすい**ので、好適な樹相に誘導する上で定植後数年間は窒素施肥を行わないか、大幅に減らすことが必要な場合が多い。自園の窒素施肥量を決定するためには、目標とする樹相を明らかにするとともに、現在の樹の状態を正確に把握する必要がある。樹相の把握には、「樹相診断」が有効である。

**有核「巨峰」は「好適樹相」の指標**があるので、樹相診断結果に応じて窒素施肥量を加減する。

**有核「巨峰」以外**では、新梢の伸長程度、葉色および葉の大きさ、さらに果実品質（着色等）、落葉の状況などから樹勢を把握する。**樹勢が強いと判断される園地では、適正な窒素施肥量の決定のために、圃場の一部分に2～3年化学肥料の減肥を先行させる**場所を設ける。ここでの様子を見ながら全園で減肥を実施するかどうか判断するとよい。

「ナガノパープル」では、当面の目標樹勢は、満開期の新梢基部直径（第4葉～5葉節間中央部の最大直径）で9～10mmである。成園化した後も樹勢が著しく強い場合は、無窒素施肥で管理すると共に、隣接樹の間伐などにより主枝の延長を図る。

#### (2) 有機質肥料、有機質資材を利用して化学肥料を代替する技術

堆肥を施用する場合、堆肥中に含まれ有効化する肥料成分を換算し、その分だけ肥料を減肥できる。

例えば、牛ふん堆肥（肥効率 20%）を2 t (2,000kg) 施用したとき、1年間に有効となる養分量は、窒素4kg、リン酸12kg、カリ18kgなので、その分を減肥できる。詳細は、前記した「Ⅲ 有機物の肥効特性」を参考にする。

**堆肥の施用時期は、翌年の遅効きを防ぐため9～10月以降12月までに施用する。**堆肥の連年施用に当たっては、単年度の有効成分とともに、土壌中に蓄積された窒素成分の無機化量も加味する必要がある。そのため、毎年新梢の伸び、葉色、果実品質、落葉の状況などに注意し、施肥量を加減する。

堆肥の**連年施用により土壌中に特定の養分が過剰に蓄積**する恐れがある。定期的に土壌診断を行い、特定の養分が過剰と診断されたら、堆肥施用を一時休止する。